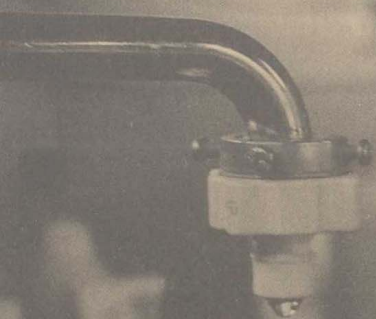


ラジオデイズ 鈴木清剛



ラジオデ

鈴木清剛

江苏工业学院图书馆
藏书章

ラジオ デイズ

★

一九九八年一月二六日 初版発行
一九九九年二月二〇日 8刷発行

著者★鈴木清剛

装幀★泉沢光雄

発行者★清水勝

発行所★株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二二二

電話★〇三三四〇四一二〇・「営業」〇三三四〇四八六二「編集」

振替口座★〇〇一〇〇七一一〇八〇二

印刷★大日本印刷株式会社

製本★小高製本工業株式会社

©1998 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落し本・乱し本はお取り替えいたします

ISBN4-309-01195-0

ラジオデイズ

1

夜の町にも、パンを焼く匂いがしてるのか。

お釣を受け取りながらカズキはそう思った。サキヤがタクシーを降りるなりいい匂いがすると言っていないければ、きっと気付きもしなかった。日常の生活に溶け込んでしまったその匂いは、もう完全にカズキの鼻を麻痺させていた。微かに感じとれたような気もしたが、外へ出た頃にはすっかり消え去っていた。

「近くにパン工場があるから」

「パン工場？」

サキヤは不思議そうに言った。

「一日中、それこそ深夜も、ずっと焼いてるらしいよ」

本当はもう少し言葉も必要なのだろうが今はとても喋る気になんてなれず、それきりカズキはアパートへと歩き始めるだけだった。

白いプラスチック板に青字で崎谷歯科と書かれた近くの窓に、助手をするサキヤの母親をよく見かけた。

カズキの家と二軒しか離れていないこの歯科医院で、弱味を掴まれることから付き合いは始まった。母に手を取られ泣き叫ぶカズキを、待合室の奥のドアの隙間からサキヤは見ていた。『泣き虫毛虫』を略して『ケムシ』と呼んだり泣き真似をしてみたり、歯の痛みがすっかり消えうせた頃までも顔を見さえすれば冷やかされていた。全くしつこい奴。それがサキヤの第一印象だ。

サキヤには二つ年上の兄がいた。いつも小綺麗こけいな格好をしている子供達で、シャツなどをよく見ればワニや傘のマークが見付けられた。テレビゲーム、超合金、自転車、システム学習机、彼等は何でも持っていた。歯医者しやのドリルの音も、真新しい服や玩

具も、生白い二人の兄弟にはとてもよく似合っていた。

物目当ての近所の少年達が常に崎谷兄弟には群がった。同じ年の者ならもちろんのこと、サキヤは二、三歳上の者にもいつも強い口調と態度だった。サキヤの持ち物を見たり触ったりするために、その高慢な態度を許すしかなかった。そして本人もまた、この関係がよく解っていた。物質的なこと以上に崎谷達には強い存在感があった。サキヤは特別そうだった。普通の子供にはない鋭い空気を放ち、一重のつり上がった目で睨まれると誰しもが何も言えなくなってしまうのだ。

どんなに多くの物を持っていたても、サキヤは欲しい物があれば絶対手に入れなければ気が済まない質だった。カズキは家が近いためにマンガ本を貸すことがよくあった。戻って来ることがないと判っているながらも、執拗な態度と威圧感にはどうしても勝てなかった。家が二軒しか離れていないのがまた厄介で、下手すると部屋にまで乗り込んで来るのだ。さすがにカズキも強く返却を求めたりもした。すると決まって、

「三丁目の公園の砂場に埋めた」

とブツリ言われるだけだった。

真に受けて掘りに行ったこともあった。しかし初めからあるわけなどないのだ。

近所仲間は五、六人いたが、小学校へ入学するとカズキとサキヤだけが同じクラスとなり、二人は顔を合わせる機会が断然多くなった。全く最悪だと思いながらもずると関係は続いていた。深刻に苛められたりすることはなかったが、たまにクラスメイトの前で中傷めいた言葉を言われることがあった。カズキにはだらしない笑いをつくることぐらしか出来なかった。するといつのまにか二人は仲良しコンビとして見られるようになっていた。冗談じゃないと思っていながらも態度に出すことは出来ず、担任までもがそう受け取るようになった。一刻も早くサキヤと離れたい。カズキはそんなことばかり考えていた。

ここ、と言いながら鍵をまわし、
狭いけど、と扉を開けて、

入れよ、という言葉と同時に部屋の明かりを点ける。

振りドーナツツ化したベッドの毛布、吸い殻はないけれど灰のこびりついた灰皿と、水色のクリネックスの箱があった。サキヤは背中を丸めて靴の紐をほどこいている。

喋ることがない。ひとまずFMラジオのスイッチをオンにすると、聞き覚えのないハードロックが流れ出した。音を小さくしようとダイヤルを摘んだとき、

「なんにもねーな」

とサキヤは言った。

返事もせずに冷蔵庫を覗きに向かった。缶コーヒーを二本取り出して渡した。

「その分、広くていいけどな」

そう言って少し笑うサキヤの顔を見ながら、その男が今自分の部屋にいるのだということを実感した。

あー。こいつ、本当にうちにいんだ。

男は部屋の空気を変え、ラジオの音を変え、壁紙の色さえも変化させていた。言葉もないまま、カズキはそいつの細長い瞳をじっと覗き込むだけだった。

新学期だというのにその年の桜は早咲きで、すでに散りかけていた。

二年に一度しかクラス替えはないから、これで卒業まで一緒というのも同時に決ま

った。またしても同級生をやるはめになったと、カズキはうんざりした気分で新しい自分の席へと着いた。五年二組と括られた掲示の中にサキヤの名前を認めたときは、途端に胸の膨らみもぶっ飛んだ。待望の一大イベントを無にしてくれたその相方に、嫌みな挨拶の一つでもしてやりたかった。しかし教室にサキヤの姿はなく、まだ手垢にも汚されていない机と椅子がきちんと並んでいるだけだった。

数日後やっと登校して来たと思ったら、いつの間にか朝の教壇に先生と並んで立っていた。半ズボンでむき出しになったその膝は、気味が悪いほど生白かった。崎谷君がお家の都合で秋田に転校することになりました。大学を出たばかりの女の先生は、何の前置きも無しに言い放つ。

。耳朶が熱くなるのを感じた。やわらかい頬肉が勝手に少し震え、蝶のような瞬きをした。

サキヤが転校？

思わず笑い出しそうになる顔の筋肉に力を込めた。

おかしいな表情の自分を気付かれないように、カズキはそっと俯いた。慈しみの言葉を振り切るかのようにサキヤは教壇から音もたてず真っ直ぐと歩き始めた。やがて席

へと着いたその後頭部は、いつもと変わりなくきれいに刈り上げられていた。

「崎谷さんちのお母さん、蒸発したんだって」

サキヤが転校したわけを、しばらくして母親から聞いた。その頃のカズキには『蒸発』という意味が分からず、窓の隙間にいたサキヤの母の横顔が、ボワンと煙のように消えていくという言葉通りの映像を頭に浮かばせた。母親の一言で崎谷齒科の窓は神秘的な場所に変わってしまった。

しかし、サキヤが転校してから窓は一度だって開かれることはなかった。

母親が失踪し、父親はノイローゼぎみとなり、医院をしめていたのだ。サキヤは母方の親類が引取り、兄の方は父親が育てるということで話がまとまっていた。サキヤが秋田のどこかにいるということは聞いていたが、父親と兄の行方など知る由もなかった。

高校に上がる頃、サキヤが横須賀の自衛隊訓練校にいますという噂を一度だけ耳にし

た。その頃になると、もう崎谷という名前を聞いても何とも思わなくなっていた。

「へエ、自衛隊か。すげえな」

それで話の全てが終わった。

窓の開くことのない崎谷齒科もそのままだった。

高校を卒業すると、カズキはカセットテープを加工する工場に勤めた。中身の生テープを本体にセットし、販売元に納品する。ただそれだけの工場だった。ほとんどの工程が機械で行われたが、品を配備し、取り出し、次の工程へ流すのは人間だった。

入社してすぐに当てられた仕事は、テープを十本ずつ箱に詰め、その箱をまたダンボールに詰め、出荷先別に仕分ける、という内容だった。あまりのことの単純さに戸惑いを感じた。五時の終業を知らせるチャイムがなる頃には嫌気と腰の痛みだけが残った。そのうちにやめるだろうと思っていたが、いつの間にか三年目の勤めに入っていた。

カズキは最終検品をする部署へと移された。一本のテープを五人の人間が五回チェックするのだ。ページの制服が間隔をあけて作業台に並ぶのだが、現場はときどき

何かの手術の光景を思わせた。カズキは三番目に調べる係を担当していた。一、二番の者がOKを出した製品をさらに検品する、というわけだ。ミスを見付けたときは少し得意になり、中止製品のボックスへと放り込む。四、五番目で発見されることもあったが、五人の中でカズキが一番若いこともあり、よく見付けた。

しかし一日何千本と検品してミス商品が二十本あれば多い方だった。会社としては少ないほど良いわけであり、ミスがなければ退屈な、神経と目が疲れるだけの仕事だった。

金が貯まるとカズキは家を出た。工場へはそれまでバスを二本乗り継いで通勤していたが、自転車で行ける所に部屋を借りることにした。そこは川沿いの工業地帯で至る所に工場があった。アパートの一番近くにある一つがパン工場だった。

独立して半年を過ぎた頃、作業中のカズキに電話が入った。工場では一日の生産目標というのがあるため、私用電話で生産ラインを抜け出すことにいい顔はされなかった。友達や家族には工場への電話は緊急な場合か、そうでなかったら昼休みを組うようにと言っていた。ライン班長に実家から電話だと告げられたときは、咄嗟に誰かがヤバイんじゃないかと思った。この三年間、一度だって実家からかかってきたこと

などなかったのだ。

急ぎ足で冷たく光る薄いグリーンの廊下を行きながら、誰のことなのかと親族のリストを頭にあげていた。

事務所に入ると珍しく若いポニーテイルの女の子が、二番に入ってますとVサインをして教えてくれた。初めて見る顔だった。

赤く点滅した二番のボタンを押すと、母親の声がした。ヤバいのは母さんではないらしい。

——カズキ？

母親はまた言った。ポニーテイルを横目に見ながら返事した。

——珍客が来てるわよ。

珍客？

——歯医者だった崎谷さんちの子。同級生だったでしょ。見違えちゃったわ。あんたを訪ねてきたみたい。

しばらくは誰のことか分からず繰り返し内容を聞き、サキヤという人物があのだというが、ようやく分かってきた。つまりソレらしき者が実家に来ている。

十年以上も会っていない奴が突然あらわれた。ということらしいのだ。

母親は彼を待たせておくから仕事が終わる次第実家に直行するように。と、早口に言つて電話を切つた。カズキも受話器を置いた。ポニーテイルをもう一度見たかつた。左手で業務用の大きな電卓を素早く叩き、右手でボールペンを走らせているのだが、両手が同時に動くということはさすがになかつた。カタカタカタツとやつて、ガリガリッとやつていた。

「失礼しました」と声をかけると、

「はい」と小さな声で返事した。

もちろん手は止まらず、カズキを見ることがもしない。

カタカタカタツ、ガリガリ。

カタカタカタツ、ガリガリ。

カタカタカタツ、ガリガリ。

カタカタカタツ、——サキヤ？

今家にいるというのが驚きだつた。どういふことなのか分からなかつた。

オレに一体どんな用事があるつていうんだろ？ 皆目見当もつかぬまま嫌な思い出

ばかりが蘇る。会いたくなかった。このまま逃げたいと思った。転校してからもう十年も経っている。当然サキヤも二十一歳になっているわけだ。カズキは想像力をフルに駆使してサキヤの顔を描こうとしたが、頭に浮かぶのは小学五年生の尖った目をした少年ばかりだった。

実家へ着いてまず目についたのは、玄関にある履き込まれたナイキだ。

「前のおんたの部屋に通しといたわよ」

母親は顔をあわせるなり言った。なんで勝手に上げたんだよと詰ろうとしたが、そんなのは後回しにすることにした。とりあえずは以前の自分の部屋へと急いだ。

扉の前まで来ると、にわかに緊張している自分があった。その部屋は家を出てから半年しか経っていないため、まだ物置にもされてなく中は完全な空部屋で、カーテンさえも取り外されていた。今部屋にあるのはサキヤだけだった。カズキは一応ノックをして静かに扉を開けた。

微かに黴の臭いがした。